|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　＜第72回院内集会＞「低線量被ばくの現状と被曝影響の評価について」の院内集会シリーズ三回目です。日時：7月26日（木）午前11時―午後1時(１０時３０分から参議院議員会館玄関ロビーで入館証を配布)会場：参議院議員会館一階102会議室テーマ：「低線量自然放射線の人体影響に関する調査研究の成果（分かったことなど）」講師：秋葉澄伯さん（＃公益財団法人 体質研究会主任研究員）講演内容：環境放射線に被ばくすることによるがんリスクの評価・検討の現状について、「原子放射線の影響に関する国連科学委員会（UNSCEAR）2017年報告書」をもとに紹介、解説。【プロフィル】　秋葉澄伯（あきば・すみのり）さん１９５１年北海道生まれ。医学博士。がんの疫学専門。札幌医科大学医学部卒業後、同大学大学院社会医学系専攻修了。８２年放射線影響研究所研究員、９２年鹿児島大学医学部教授。2016年度まで同大学大学院医歯学総合研究科教授（疫学・予防医学）。公益財団法人「体質研究会（＃）」主任研究員。【講師から】2018年3月に公表された原子放射線の影響に関する国連科学委員会（UNSCEAR）の2017年報告書では、環境放射線に被ばくすることによるがんリスクが評価・検討されました。対象となった主な研究は、テチャ川流域住民やインドケララ州カルナガパリ住民でがんリスク、イギリスや欧州での小児がんリスクなどです。環境放射線被ばくでは、比較的低い線量に長い期間に亘って被ばくすることにより、累積した被ばく線量が低線量の目安である100mGyを超えることが少なくありません。実際、自然放射線レベルが高いことで知られるケララ州カルナガパリ地域では、5万人以上の住民が累積で100mGy以上の被ばくを受けています。しかし、住民にがん患者が増加したというデータは得られていません。一方、テチャ川流域では、マヤーク核施設から再処理のときに生じる放射性で液体廃棄物が川に流されたことで深刻な放射能汚染を生じ、住民で白血病などが増加しました。この二つの調査を比較しながら、疫学調査の結果を評価する際の注意点についてお話ししたいと思います。また、イギリスや欧州では自然放射線レベルが特に高いわけではありませんが、環境放射線への被ばくにより小児がんリスクが増加するとの報告が相次いでいます。これらの調査結果を、どう考えるべきかについても、お話ししたいと思います＃ 公益財団法人 体質研究会昭和16年11月18日、京都大学名誉教授（医学部）辻寛治氏の寄付行為により文部省所管の財団法人として認可設立。事業内容として体質及びこれに関連する遺伝・内分泌・代謝・免疫・加齢ならびに血液・移植・微生物・悪性新生物に関する研究を行い、かつ研究の成果を実施し、学術の発達に寄与し体質の改善、疾病の治療・予防、健康の増進に貢献することを目的とする。平成22年9月1日の登記により公益財団法人体質研究会となる。SVCF事務局...[メッセージの一部が表示されています]  [メッセージ全体を表示](https://mail.google.com/mail/u/0?ui=2&ik=772f14d9b0&view=lg&permmsgid=msg-f%3A1604318185593577618&ser=1)

|  |  |
| --- | --- |
| https://ssl.gstatic.com/ui/v1/icons/mail/no_photo.png | 返信全員に返信転送 |

 |  |  |

